

## 生活の芸術

チャーホフ (Tshekhob) の書簡集に次のような一節がある、(その時彼は愛琿付近を旅行していた、) “わたしは一人の中国人を酒屋に請んで焼酒を飲んだ。彼は飲む前に杯を挙げてわたしと酒屋の主人及び店員たちに向って、“請”<sup>どうぞ</sup>と言った。これは中国の礼儀である。彼は決してわれわれのように一気に飲み干さず、一口一口と啜る、一口啜るたびに、ちょっと物を食べる。それからわたしに何枚か中国の銅銭をくれて、感謝の意を表わした。これはとんでもなく礼儀のある民族だ。……”

一口一口と啜るのは、確かに中国にしか存しない飲酒の芸術である。乾杯する者は酒の味を知ることができない。泥酔する者は微醺の味を知ることができない。中国人は飲食ということではまだ少し享用の術を心得ている、だが一般の生活の芸術はとっくに伝を失っている。中国の生活の方式はいまではただ両極端しかない、禁欲でなければ縦欲であり、酒ということばさえ口にするのを許さないの でなければ、身体を酒樽に浸けている。二者は互に反動であって、それぞれに益々増長し、その結果は同様な汚い糟である。動物の生活にはもともと自然の調節があるが、中国は千年以前に文化が発達し、一時はすこぶる霊肉一致の現象を呈するに至ったが、後になって禁欲思想が打ち勝って、現在のような生活に変わってしまった。自由もなければ、節制もなく、一切が礼教という仮面の下に圧迫と放恣を実行していて、実際いわゆる礼というものとはとっくに消滅して存在しない。

生活はとても容易な事ではない。動物のように、自然に簡易に生活する、それは一法だが、生活を一種の芸術とみなして、微妙に美しく生活するのも、又一法である。二者の外に別に道はない。有るとすると則ち禽獣の下での乱調な生活である。生活の芸術はただ禁欲と縦欲との調和である。エリスはこの問題についてとても精密で周到な意見を持っていて、彼は宗教の禁欲主義を排斥する。だが禁欲もまた人間性の一面であって、歓楽と節制の二者は併存し、そして相反せずに実は相成るのだと考える。人間には禁欲の傾向があり、即ちそれが歓楽の過度を防ぎ、そして即ち歓楽の程度を増す所以だとする。彼は「聖フランチェスコとその他」という論文で述べたことがある。“この二者(即ち禁欲と耽溺)の一をその生活の唯一の目的とする人は、まだ生活をする前にすでに死んでいる。先ずその一(耽溺)を極端にまで推し進め、それから転じて他に向う人は、その人こそ真に人生とは何かを理解し、やがて模範的な高僧と記念されるだろう。しかし終始この二重の理想を尊重する者こそ、生活の方法を知る明智ある大師なのだ。……一切の生活は建設と破壊であり、取り込みと付与であり、永遠の構成作用と分解作用との循環である。真んな生活をしようとするれば、われわれは大自然の豪華と厳しさを模倣しなければならない。”彼はまた言ったことがある。“生活の芸術は、その方法はただ微妙に取得と放棄という二者を混和することにしかない、”とさらに簡明にその考えを説明している。\*

生活の芸術という名詞は、中国固有のことばで言えばすなわちいわゆる礼である。スティル博士は『儀礼』の序で、“礼節は決して単に一組みの儀式で、後世が沿襲するような、空虚無用のものではない。これはそれによって自制と整頓された動作の習慣を養成するのであって、唯万物

を領解し一切を感受することができる心を持っている人間だけがこのような落着きのある態度を持つのである。”以前辜鴻銘先生が英文の『礼記』の訳名の妥当でないのを批評して、“礼”は Rite でなくて Art であるとするのを聞いて、当時はちょっとはずれているように思ったが、実はその方が正しい。だがこれは本来の礼を指すのであって、後の礼儀礼教はいずれも墮落したもので、この称呼を当てるには足りない。中国の礼はとくに失われ、ただ上文に言うように、茶酒の間に僅かに残っているにすぎない。去年西洋人が上海の娼婦禁止に反対し、妓院は中国文化の所在する所だとした。この言葉は確かにいささか出たらめなところがあるが、よく考えてみるとやはり若干の理由がないわけではない。われわれは唐代の官妓や、ギリシアの“女ともだち”(Hetaira)の風流事を引合いに出して弁護する必要はない。ただ某外人の警句、“中国で妓女を連れ歩くのは西洋の求婚のようなもので、中国で妻を娶るのは西洋での女郎買いのようなものだ”を思い出すか、あるいは『愛の術』(Ars Amatoria)はほんとうはただ草野の間にしか存在しないと感ぜないわけにはいかない。われわれは決して某西洋人のように妓院を保存しようとはしないが、ただ怪論の中にも、常に真実が存在するのだと思うだけである。

中国でいま切実に必要なのは新しい自由と新しい節制である。それでもって中国の新文明を建造し、つまり千年前の旧文明を復興し、またつまり西方文化の基礎であるギリシア文明と合一するのである。こうした話はあるいはあまりに大きすぎあまりに高すぎるかもしれない。だがわたしの考えではこれを置いて中国には別に救いを得る道はない。宋以来の道学者の禁欲主義は総じて無用のものとなった。なぜならそれはただ縦欲を助長するばかりで調節の役を果すことが出来ないからである。しかしこの生活の芸術は礼節を保ち中庸を重んずる中国にあっては本来何の新奇な事物でもない。たとえば『中庸』の初めに、“天命之を性と謂い、性に<sup>したが</sup>率う之を道と謂い、道を修める之を教と謂う”とある。わたしの解釈によればつまりそのことのとても明白な主張なのである。だが後代の間人はすべてただ章の意味、節の意味を講じるだけで、誰も実行したものがない。わたしは半分の『中庸』で世の中が救えると言うのではなく、ただ中国はこの思想を理解できるということを示しただけである。日本も宋学の影響を受けたけれども、生活の上では平安朝の系統を受け継いだと言え、まだ多く唐代の流風余韻を残している。したがって生活の芸術を理解するのもずっとたやすいのである。多くの風俗に日本が確かにこの芸術の色彩を保存しているのは、われわれ中国人の及ばぬ所である。だが道学者から見れば、それこそまさに彼らの欠点であるのかもしれない。(民国十三年十一月)

※初出：1924年11月17日『語絲』第1期

---

\* 周作人『自分の畑』「エリスの話」注参照。